

# 北原キヨの教育思想

Educational Thought of Kiyo Kitahara

佐藤実芳

SATO Miyoshi

キーワード：北原キヨ、武蔵野東学園、インクルーシブ教育

## はじめに

今から50年以上前に、「幼稚園教育を一年早くやることは、大げさにいえば、大学を二年分余分に学ぶより効果があるということ、早期教育の一年の価値は大学教育二年分に相当する価値がある」<sup>1)</sup>と早期教育の価値を認識して、幼稚園を開園した北原キヨ（大正14年—平成元年）という人物がいた。北原キヨは、幼児には学習意欲があるわけでないので、子ども達に魅力的な体験を提供することができる豊かな環境を整える必要があると考え、最高の設備を整えた幼稚園を作り上げた。それが、武蔵野学園武蔵野東幼稚園である。

更に北原キヨは幼稚園だけではなく「小学校3年生ぐらいまでちゃんと指導すれば、あとは放っておいても大丈夫」<sup>2)</sup>と幼稚園から継続して小学校教育をすることが必要であると考えていた。正に今求められている幼小の連携である。そして当該学園は昭和52年に武蔵野東小学校を開校した。

当該学園は、昭和58年に中学校を、昭和61年に高等専修学校を設立して、幼稚園から一貫した混合教育のシステムを作り上げた。武蔵野東学園の教育は海外でも評価され、昭和62年にはアメリカのマサチューセッツ州ボストン市に、ボストン東スクールを姉妹校として開校し現在に至っている。

本稿では、北原キヨの著作をもとに彼女の教育思想を再検討し、北原キヨが真に目指した教育を明らかにする。

## 1. 北原キヨの子ども時代

北原キヨは、自著『可能性を求めて 武蔵野東幼稚園から小学校へ』の中で、自分自身の小学校時代の体験を記している。まず、どんなことがあっても小学校に行くという気持ちが非常に強く、高熱があっても登校して、6年間皆勤であった。二つ目に毎朝新聞を読んで天皇の詔書を暗記しているので、詔書が出た日には職員室に呼ばれて先生方の前で暗唱させられるほど記憶力が良かった。三つ目に、自分の名前を聞かれると一番好きな友達の名前を言ってしまう等、頭の中ではわかっているが異なること又は逆のことを言ってしまうという不思議なところ

があった。自閉症の子どもは、わかっているけど違う行動をしてしまう。北原キヨは、自分自身が自閉症であったかどうかはわからないが、「自分の体験から自閉症児のことがわかる」<sup>3)</sup>と記している。

## 2. 国民学校・小学校教員時代

北原キヨは、昭和16年、栃木県上都賀郡日光町立第二国民学校（現：日光市立清滝小学校）で2年生の担任として教員生活を始めた。初めての教員生活で、担任のクラスの子ども達に「初恋」をしていたのかかもしれないと記しているほど、教育に全力投球した。担任をしている子どもが勉強ができないのは、自分の教え方が悪いと考え、教育経験が豊富な先輩教員の指導方法を熱心に学んだという。戦争中でありながら自由な雰囲気の小学校で、校庭の裏の川原に小さな黒板と白墨、ゴザとお弁当を持って行って勉強することもあった。近くに山もあり、土が粘土質であったので粘土細工をすることもできた。漢字10文字を覚えたら山に登っても良いというと、子ども達は必死で漢字を覚えたい。時には、集めてきた石と木で青空教室を作り、北原キヨが校長先生になり児童を先生に見立てて、子どもが子どもを教える「ごっこ遊び」をさせて学習させた。この当時の経験が、武蔵野東幼稚園の造形や体を動かす教育の基礎となっている。

「こうした教育の中で、学ぼうとする気持ちと教えようとする気持ちがピタッとするものがあったのです。の<sup>・</sup>る<sup>・</sup>ということは、授業にとってとっても大切なことで、子どもをの<sup>・</sup>せられない授業は、これは全くダメなのです。興味付け、といいます、こうやって、とか、ああやって、とかいうことよりも、どうやれば、子どもがの<sup>・</sup>ってくるのか、ということその場その場で押さえていかないといけないのです。」<sup>4)</sup>

戦後6・3制の開始に伴い国民学校の教員免許状が無効になるため、小学校と幼稚園の教員免許状の書き換えのための講習会を受けることになった。そこで北原キヨは、「コアカリキュラム」の説明を受け、その内容に大きな感銘を受けた。コアカリキュラムというのは、「実生活における経験と結びつくような事柄を、すべての教科目の中心として組み立てた教育課程の方法」であると学んだ。戦後日本では各地でコアカリキュラムが実践されたものの、理解不足のために思うような成果が得られなかった。そのことについて、北原キヨは以下のように述べていた。

「戦後アメリカから自由と言う言葉が導入されたとき、日本人は自由を自由放任と理解した。アメリカ人は社会の中で、個人の行動が許される範囲を自由としている。自由にはこうしたおのずから制約が課されている。日本の教育現場は、自由とは子どもに制約をかけず伸び伸びと育てる環境を作ること、そして教師自身も何でも自由にやってよいと捉えた。しかし子どもの教育は、子どもを自由に行動させながら、教師は目に見えない手綱を操作して、子どもたちを望ましい方向に導くものだ。」<sup>5)</sup>

北原キヨは、「子どもサイズの社会経験をこの中に織り成して、その織り成された社会環境の体験を与えることが『コアカリキュラム』」<sup>6)</sup>であると理解し、後に武蔵野東幼稚園で実践することになる。子どもが自ら学ぶという教えは、「社会環境の整備と、家庭環境の整備と、教育環境の整備」が絶対不可欠である。教員に求められるのは、教材研究等はもちろんであるが、子どもの発達段階を熟知することと、教育経験から身に付く直感的な「『勘』であり、体験であり、工夫であり、新鮮さ」<sup>7)</sup>であると、高度な資質を考えていた。

### 3. 上京と結婚、そして幼稚園設立へ

北原キヨは中学校と高等学校の教員免許状取得のため、昭和26年に上京し、明治大学法学部で中学校と高等学校の社会科の教員免許状を取得した。この段階で、北原キヨは幼稚園から高等学校までの全ての教員免許状を手に入れた。現在小学校の教員には、幼小の連携という視点から幼稚園教諭免許状が、小中の連携という視点から中学校教諭免許状が必要とされている。北原キヨは、半世紀以上にその必要性を感じて実行に移していたといえる。その後も小学校の教員生活を続けていたが、縁あって鋳物工場を経営していた北原勝平との結婚で、教員生活に幕を降ろした。

工場経営は順調であったが、鋳物工場のある場所が準工業地域に指定され、公害問題から工場経営の継続が困難になった。他の仕事をするという選択もあったが、何か人から喜ばれるような仕事がしたいという夫妻の気持ちから、北原勝平は妻が望んだ幼稚園を開園する道を選んだ。幼稚園の開設には多くの困難があったが、昭和39年11月、文部省が北原勝平・キヨ夫妻の学校法人・武蔵野東幼稚園の設置を認可した。

### 4. 北原キヨの幼稚園教育

北原キヨは自らの小学校教員の経験から、幼稚園教育が子どもの発達に極めて重要であると考えていた。ところが当時は幼稚園不足から、二部保育を実施している園すらあるという悲惨な状況であった。自分が理想とする幼稚園教育を実現するために、どのような幼稚園にするのかを考え抜いて作り上げたのが武蔵野東幼稚園であった。

「私は、絶対にすばらしい教育をやろう、生活保育、季節を軸とした教育、体をつくり、心をつくり、子どもに内在するものを本当に開花させよう。そして子どもたち自らが子どもを育てる教育をしようと決心し、それには有形、無形に教育環境をどのように整備していったらよいのかと、日夜考えたものです。」<sup>8)</sup>

「武蔵野東幼稚園」という幼稚園の名前には、北原キヨの幼稚園教育に対する強い思いが込められている。幼稚園教育は、土にしっかりと根を張らせてこそ成果をあげることができる。そのためには「武蔵野」という土が必要である。「東」という言葉には、朝日のごとく常に上に向かう「向上の」の意味を含めている。園章には、武蔵野の象徴である紫草の中に「東」

を入れた。紫草の種が武蔵野の土地に根を張り太陽の光を受けて大きく育つように、園児も力強く育てたいという願いが込められていた。

北原キヨは、早期教育の1年の価値は大学教育の2年に匹敵するものだと、幼稚園教育の重要性を認識していた。と同時に、まだ幼い幼稚園の園児には、自ら学ぶという意味や意欲を期待することができないので、子ども達に豊かな体験をさせるためには最高の設備が必要であると考え、素晴らしい施設設備が整った幼稚園を完成させた。

「早期教育と言うのは、精神的な楽しみを小さいときから与えるということで、生活が充実するとともに『心が立つ』ことに役立ちます。それをよい環境でやる必要があります。」<sup>9)</sup>

北原キヨは、子どもの心と身体を健やかにたくましく育てたいという思いから、武蔵野東幼稚園の教育目標を「みんななかよし」「すなおなこころ」「こんきのよさ」として、まず健康な身体づくりからはじめ、健全な心を育てることを考えていた。よい生活習慣を身に付けさせ、幼児体育・音楽・造形の指導を中心にした楽しい幼稚園生活を園児に満喫させて、学校教育を受けるのに必要な根気のよさを育てて卒園させることを目指していた。

日本には四季があり、豊かな自然がある。子どもはその「自然」や「季節」から多くを体験的に学んで大人に成長していく。年齢が幼いほど適応力に乏しいため、幼稚園では園児に「自然」や「季節」を軸として、それらを中心に生活を適応させていく力を育てることが大切であると、北原キヨは考えていた。この考えから生まれたのが「生活保育」である。

北原キヨが目指したのは早期教育といっても、小学校教育を先取りする教育ではなく、これから力強く成長する子どもに必要な土台作りであった。北原キヨは、21世紀を生きる日本人が国際人になるために最も必要なのが自立心、独立心、円満な人格であると考えていた。そしてそれは、大学生活で身に付くようなものではなく、3歳・4歳から小学校での教育において基礎が作られてこそ、その後豊かに育つと考えていた。

昭和39年11月、文部省が武蔵野東幼稚園の設置を認可した。同園は翌年4月の正式開園を待たず、入園料無料・保育料半額の条件で園児を募集したところ、80人程度の園児が入園した。11月の開園であるが故、5ヶ月で1年分の幼稚園教育をする意気込みで、全教員が園児の教育に取り組んだという。

『武蔵野東学園物語』には、昭和43年に公開保育を実施した際、北原キヨが、「幼児体育」は体力の向上と強健な精神力の涵養に効果的であるとその重要性を説き、それから全国的にこの言葉が広まったと記してある。北原のキヨの早期教育は、「遊び」が中心で、子どもが楽しく遊ぶことにより、心身ともに人間の土台を作り上げることであった。その考え方を保護者に理解してもらうために母親研修会を開き、家庭でも十分に遊ばせて、体力作りと聞き分けの良い我慢ができる子どもを育てることが大切であることを話した。また、母親として子育てには栄養や救急医療の基礎知識が必要なので、その知識も提供した。北原キヨが目指した早期教育と

は、簡単に教育効果が現れるものではなく、各々の子どもの才能が将来開花するための土台づくりを目指したものであった。

### 【生活療法】

仮入園の時に80人程度の園児が入園したが、その中に脳性マヒ、難聴、自閉症<sup>10)</sup>の子どもがいた。北原キヨが小学校の教員を始めた頃は、養護学校（現在の特別支援学校）や特殊学級（現在の特別支援学級）が存在しなかったため、どのクラスにも障害児が在籍していた。クラスに、障害児が5,6人いたこともあり、幼稚園にも違和感なく障害児を受け入れた。このような経緯があり、昭和40年4月に正式に幼稚園が開園した際も、入園児の中に5人の自閉症児がいた。これが、武蔵野東学園の混合教育の始まりである。キヨは『可能性を求めて－武蔵野東幼稚園から小学校へ』で、最初から障害児教育を目的としたのではないことを、以下のように記している。

「・・・子どもを預かった以上、少なくともものんびりとはやらないし、その子ども達を真剣に育てたことは事実です。そういうふうに取り組むなかに障害児が入ってきましたが、私の姿勢や考えには障害児教育をやってどうのこうのしようという気持ちや野心は、とりたててありませんでした。どんな子どもだって育てられる指導力は、当然必要なのだということにすぎなかったのです。」<sup>11)</sup>

北原キヨは「自閉症児には内在する能力がありながら、それが外に出てこない、という非常にもったいない障害」<sup>12)</sup>と感じていた。「気を使わせ、体を使わせ、心を使わせるということが、とくに自閉的傾向の子どもの発達を促す上に大切であると考え」<sup>13)</sup>、自閉症児が周囲に関心を持つように根気よく指導した。自閉症児の場合、健常児に比べて環境に対する適応力が弱い。そのため、多くの刺激を与える必要がある。しかし、教育の考え方は健常児と同じであった。幼稚園に入園した自閉症児が言葉を話せるようになるなど症状が改善されたことで、「生活保育」が自閉症児の指導法としても有効であることが明らかになり、「生活療法」と呼ばれるようになった。

北原キヨは、生活療法の基本を発達と考え、「生<sup>ナマ</sup>の子どもを教育の中心において、その発達を基本に据え、そこから子どもの発達を総合的にとらえ、促していく方法」<sup>14)</sup>と説明している。実際生活の様子から、子どもの興味や関心、身体的な動き、行動力、知的能力などの発達がどのような状態にあるのかを総合的に把握した上で、当該年齢の子どもが目指す発達を可能にするのに相応しい教育や訓練を行うのが、生活療法である。言葉を話すことができない自閉症児に、言葉の訓練だけをして真の教育効果を期待することはできない。言葉は生活の中でこそ使う意味があるので、子どもの総合的な発達を促進し生活の質を高めることで自然と言葉が出てくるのである。生活療法はマニュアル化された指導ではなく、目前にいる一人ひとりの子どもと真剣に向き合う手作り教育であった。

### 【混合教育】

「自閉症児は、普通児との混合教育で良くなる」というのが、北原キヨの信念であった。幼稚園の場合、学習ではなく遊びが中心であるため、自閉症児が健常児と同じ活動をしやすい。自閉症児は早期教育で症状が改善すると共に、健常児からの刺激を受けて更に発達することができる。

他方、健常児は自閉症児と接することで、違いを個性として自然に受け入れることができている。そしてこの経験から、相手の立場に立って考えることが自ずとできるようになる。それは園訓である「みんななかよし」に繋がるものであり、卒園後も周囲の人と暖かい人間関係を築くことができ、今後多様化する社会で生きていく子どもたちの大きな財産となると考えられる。

## 5. 北原キヨの小学校教育

前述したように、北原キヨは幼稚園から小学校までの早期教育の必要性を感じていた。実際、武蔵野東幼稚園に入園して「混合教育」と「生活療法」で症状が改善されて卒園しても、小学校で症状が悪化してしまう自閉症児が多くみられた。昭和52年、幼稚園と小学校の一貫した自閉症児教育を望む保護者の強い希望で、武蔵野東小学校が誕生した。

北原キヨは、21世紀を生きる国際人に必要な「自立心、独立心あるいは円満な人格」を育てるため、武蔵野東小学校の教育理念を、「強く、正しく、美しく」と表現した。強い体と何事にも積極的に取り組める行動力と勇気があり、自ら正しい知識を学んで身に付け、まことの友愛の心に満ちている子どもの育成を目指した。それが現在でも同校の教育目標となっている。幼稚園同様、障害児のための学校とは考えていなかった。

### 【教育課程の特徴】

#### (1) 天性を生かす教育

子どもの個性を尊重し、子どもの才能を十分開花させ、子どもの生命力が子どもを育てていくような教育を目指す。

#### (2) 少人数クラス編成

知識の吸収を主体とする小学校教育においては、児童に能力差があるので、少人数集団で行き届いた指導をする。子ども達の学習意欲を喚起するため、副読本、参考書、資料、教科書などを教室に揃える。

#### (3) 自発学習

学習に必要なのは、自発的な学習である。予習、学習、復習を正課授業として行い、学習した知識が即生活能力となるような指導を行う。

#### (4) 専科制

各教科ごとに専科の教員が指導する。個人指導を徹底し、塾を必要としない指導をする。音

楽では、バイオリンを取り入れた。

（５）英語教育

英語は国際人に不可欠であると考え、１年生から生きた英語教育を実施する。

（６）体験学習

スキー学習：スキー学習だけでなく、社会科として雪深い日本海側の地域、生活、文化を理解させることができる。また、移動中の列車の中で様々な人と出会うことができる。

宿泊学習：早起き等の日常生活習慣の体得と身辺整理学習、料理や選択等の実践指導を行う。

（７）体力づくり

体育の時間だけでは不十分なため、球技クラブの活動を盛んにする。

（８）水泳

温水プールを設置し、年間を通して水泳指導をする。学習から開放され、爽快に泳ぐことは、児童の楽しみになる。

（９）歩く会

健脚は健康の始まりと考え、小さな登山を行う。

（１０）補修学習

補修と個人プログラムで、得意科目も不得意科目も個人指導を行う。

幼稚園の「遊び」で培った土台の上に、小学校では子どもの個性に応じて確実に教科の学習を積み上げていくのが、北原キヨの幼小の連携である。幼稚園で小学校の先取り教育をしたとしても、しっかりとした土台ができていなければ、小学校教育の成果を十分にあげることができない。小学校では、子どもに自発的な学習習慣を身に付けさせ、自分の個性や才能を開花させることを目指させる。混合教育では、質の高い健常児の集団が必要である。そのため、健常児は心が豊かであり、健康で活気あふれる行動力と旺盛な知識の吸収力に基づく教育が十分効果をあげていなければならない。混合教育に関して、北原キヨは以下のように述べている。

「どの子にとってもよりよい成長を願い、社会に生きていくために大切な知識能力と円滑な人格を育てるためには、健康な子どもにとっても、情緒の虚弱な子どもにとっても、お互いの刺激がそれぞれの成長を援けあう学習環境でなければなりません。」<sup>15)</sup>

## 6. 北原キヨの中学校教育

武蔵野東小学校を開校した時から、中学校を開校したいという願いがあった。それは小学校開校当初、中学校がなかったため、中学受験を希望する児童に対応した受験対策の教育をせざるをえなかったからである。

「・・・小学校においては受験にわずらわされずに、健康で、豊かな子ども時代を保障する教育を行いたいと考えてきました。そして、この教育をさらに義務教育の中学校へとつ



ないで、子どもから大人への転換の教育—幼稚園・小学校のまとめであると同時に社会への出発の教育—を子どもたちの中に遺してやりたいというのが、私の常々描いていた夢でした。」<sup>16)</sup>

北原キヨは、小学校教育が基本であり、「子どもの心を完璧に開き、意欲をもりたて、様々の体験を与えることによって、子ども時代を十分に補償」<sup>17)</sup>すべきであると考えていた。北原キヨは、『生活療法・花の実り—続・可能性を求めて』で、武蔵野東中学校を以下のように記している。

「この中学校は、自閉症児にとっては社会自立への出発のための基盤の教育となり、ともに学ぶ健康な子どもたちにとっては、友愛の心に結ばれた『東っ子』の人格を完成して大空に飛び立ち、今後の高等学校・大学及び社会に目指す目標を自らの力で定め、決断できる義務教育の完成の学園となります。」<sup>18)</sup>

北原キヨは、校訓を知性(高き知性)、根気(粘り強い心と体)、友愛(暖かき友愛)とした。表現は多少異なるが、その精神は武蔵野東小学校と同じである。心の栄養は知識であり、それは自分の能力を将来発揮する専門の基礎なる学問である。中学時代に自分のために高い知性を身につけることが大切である。これが最初の校訓である。小学校から勧められてきた自主学习ではあるが、中学生にもなれば、自己管理で信念を持って学習に努めなければならない。人間には個人差がある。それを理解した上で、自分の信念に向かって努力する過程こそが尊いのである。これが2つ目の校訓である。混合教育を通して、お互いを理解するため努力しなければならないという経験を積む。友愛とは、相手の立場を理解して育てていくものである。混合教育を通して、生徒は「真実の愛、真の福祉の心」を育てていく。これが3つ目の校訓である。

武蔵野東中学校の教育目標として、『生活療法・花の実り—続・可能性を求めて』に以下の2点が記されている。

- ① 中学生としての自覚をもたせ、学習・行動・生活のすべてにわたって自主性と責任をもつように指導します。
- ② 高校及び大学、さらに社会生活等の将来を展望し、高校受験を念頭において、自ら学習を企画し、実践し、その成果をまとめていける、自主学習の確立をめざします。<sup>19)</sup>

### 【教育課程の特徴】

教育の目標を達成するため、武蔵野東中学校の教育課程には以下のような特徴がある。

#### (1) 主要5教科

きめ細かな指導と自主学习で基礎的な学力を身に付けさせたくて、発展的な学習に進む。3年間の学習内容を2年間で終わらせ、3年生のはじめに総復習した後、各生徒の志望校別の指導を行い、高校受験に備える。



## （２）宿泊研修

北原キヨは24時間教育を理想としていた。家族から離れた宿泊研修は、中学生にとって「大人への自覚の出発の場」と考えていた。朝のマラソンから始まり、清掃等の労作、夕食後の自主学習など、生徒自らが生活を管理する力を育て、自ら企画し学習する自主学習の習慣を身に付けさせることができる。また、北原キヨは、労作を学習と同等若しくはそれ以上に重要であると考えていた。労作により、責任を持って学習や仕事をする自己管理能力を育てることができるからである。労作は、「体をいわず、心をいわず働くこと、いわば行動力」を育成することを意味する。

## （３）東方式総合学習

東方式総合学習とは、基本から応用・展開までの学習により、高校入試に対応するだけでなく、将来に向けて伸びる学習能力を身につけさせるのが特徴である。

### ① 生活主任担任制

クラスにひとり生活担任を置く。生活担任とは、生徒の生活全般の教育のみに専念する教員で、人間教育の原点とする武蔵野東中学校独自の制度である。

### ② 自主学習

学習事項をまとめて記述する力を身に付けさせ、自主的に予習・復習ができるという意欲的な学習態度を育てる。

### ③ 高等学校の進学指導

武蔵野東学園には高等学校がない。健常児クラス全員が、受験して高等学校に進学していく。高等学校には各々特徴があるので徹底した志望校選択の指導が行われ、生徒一人一人に合った高等学校を選ばせる。そして、志望校に応じた学習指導を行う。

武蔵野東学園は小学校から教科専科制を採用して学習指導に力を入れている。特に英語は入試の可否の鍵となる教科なので、アメリカの大学を卒業した教師が英語の授業を行う。夏期進学指導（希望者のみ）もある。通塾の必要がないように、不得意科目を克服さ

### 宿泊研究の1日の日課

6 : 30	起床
6 : 30	マラソン・体操
8 : 00	朝食
8 : 35－8 : 55	清掃
9 : 00－9 : 10	HR
9 : 10－9 : 50	1校時
9 : 50－10 : 30	2校時
10 : 30－11 : 00	業間（行進・歌）
11 : 00－11 : 40	3校時
11 : 40－12 : 30	4校時
12 : 20－13 : 10	昼休み
13 : 10－13 : 30	清掃
13 : 30－14 : 10	5校時
14 : 10－14 : 50	6校時
14 : 50－15 : 10	おやつ
15 : 10－15 : 50	7校時
15 : 50－16 : 30	8校時
16 : 30－18 : 00	入浴及び自由時間
18 : 00－18 : 30	夕食
19 : 00－21 : 00	自主学習
21 : 30	就寝

北原キヨ『生活療法・花の実り ― 続・可能性を求めて』、中央出版、昭和58年、184頁より作成。

せるためと、更に発展した学習を指導するための補修学習がある。

#### ④ クラブ活動

「知・徳・体の調和のとれた、品格の高い人間」の育成を目指し、水泳・新体操・剣道・卓球から選択させる。クラブ活動は、楽しみながら仲間との友愛を深めることができ、また自らの個性を伸ばすことができ、人格形成に役立つ。

### 北原キヨの教育

戦前に生まれ、戦中、戦後を経験してきた北原キヨには、21世紀に活躍する人間を育てるという意識が極めて強かった。その背景となっているのが、戦前・戦中・戦後を生きてきた自らの経験である。戦前の教育には勿論誤りもあったが、戦前の教育が育てた日本人の「努力、根気のよさ、辛抱強さ、勤勉」がなければ、戦後日本の経済復興は実現しなかったであろうという思いがあった。

北原キヨは、21世紀を生きる国際人として能力を発揮するために必要なのは自立心であり独立心であると考えていた。過保護の環境で育ち、排他的な考え方しかすることができない人間では、国際人としては通用しないからである。そして、国際人として必要な自立心や独立心を育てるのは、高等学校や大学では手遅れで、幼稚園や小学校での教育が決め手となる。そのような思いで、幼稚園から出発して小学校を開校した。今、話題の幼小の連携である。北原キヨが主張する幼稚園での早期教育は、決して小学校の前倒し教育ではなく「遊び」に徹している。子どもには子どもの生きがいがあるという。

「子どもの希望、すなわち生きがいと言ってもよいと思いますが、生きがいは大人だけがもっているわけではありません。子どもには子どもの、それなりの生きがいがあります。小さな幼稚園の子どもには年相応の気負いがあり、小学生には小学生としての生きがい、中学生には大きな社会の出発点に向かって、全生涯を通した門出としての希望があります。」<sup>20)</sup>

北原キヨは子どもの生きがいを保障する学校教育を理想としており、そのために人的環境と物的環境の整備に努めた。それが、最高の設備を整えた武蔵野東学園であった。国づくりに大きな力となったと松下村塾を理想として、手作り教育を取り入れた。その一つがスキー教室をはじめとする体験学習である。日本の各地の特徴を社会科の教科書を使って教室の中で教えていても、子ども達が真に理解できるはずがない。その場に行き、さまざまな体験をしてこそ、子どもたちの真の理解につながるのである。また、全寮制の教育を理想とし、宿泊学習を数多く実施していた。小学校から自主学習の習慣を身に付けさせることと、労をいとわず行う労作を重視したのも、北原キヨの教育の特徴である。

## 終わりに

北原キヨは、「混合教育」や「生活療法」という自閉症児教育で注目を集めることが多い。しかし、北原キヨの自閉症児教育は、自閉症児のために考えられたものではなかった。健常児のために良いと考えていた教育を、自閉症児に行ったら素晴らしい成果が上がっただけである。北原キヨの理想とする教育は、健常児のみならず自閉症児にも効果があるということである。

21世紀を生きる国際人として能力を発揮することができる人間の育成を目指した北原キヨの教育は、早期教育と幼小の連携に特徴がある。幼稚園からの早期教育で、人間としてしっかりとした根をはらせ、子どもたちの年齢相応の生きがいをお大切にするこは、子どもたちの人権の尊重にも繋がる。

発達障害の子ども割合が多くなり、インクルーシブ教育の重要性が問われる現在、北原キヨの教育の考え方は、今の教育に多くの示唆を与えてくれる。健常児と障害児を区別せず、障害も個性として捉えればよいのである。

21世紀を迎えた今の日本の教育界は、国際化、コミュニケーション能力の育成、道徳教育の振興、幼小の連携等、課題が山積している。北原キヨの教育思想及び教育実践には、日本の教育界が今求めている全てのものが含まれていると言っても過言ではない。教育の問題として表面化してから対策を講じたのでは、解決するのが難しい。

北原キヨは、日本が高度成長を続けていた時代から、21世紀に必要とされる人材の育成を考えて教育実践を行っていた。教育に携わる私達は、北原キヨを見習い、未来を見据えた視点で子どもたちの教育を考えていかなければ、教育問題を根本的に解決することはできないであろう。

## 【注】

- 1) 北原キヨ『可能性を求めて ― 武蔵野東幼稚園から小学校へ』、たいまつ社、昭和52年、56頁。
- 2) 同上書、91頁。
- 3) 同上書、42頁。
- 4) 同上書、26頁。
- 5) 寺田欣司『武蔵野東学園物語 学園五十年の軌跡』、大進堂、平成24年、17頁。
- 6) 北原キヨ、前掲書、32頁。
- 7) 同上書、36―37頁。
- 8) 同上書、68頁。
- 9) 同上書、56頁。
- 10) 平成25年に改訂されたDSM-5（精神疾患の分類と診断の手引き 第5版）では、自閉症、アスペルガー障害、非定型の広汎性発達障害、小児崩壊障害を包括して、自閉症スペ

クトラム障害の呼称に統一されることとなった。本稿では、武蔵野東学園が用いている自閉症、自閉症児という用語を使用する。

- 11) 北原キヨ、前掲書、65頁。
- 12) 同上書、92頁。
- 13) 同上書、134頁。
- 14) 同上書、86頁。
- 15) 同上書、113頁。
- 16) 武蔵野東教育研究所『北原キヨの混合教育・生活療法への道―自閉児と健常児の教育に捧げた生涯―』、学苑社、平成12年、141－142頁。
- 17) 同上書、142頁。
- 18) 北原キヨ『生活療法・花の実り ― 続・可能性を求めて』、中央出版、昭和58年、14頁。
- 19) 同上書、169頁。
- 20) 武蔵野東教育研究所、前掲書、133頁。

#### 【参考文献】

1. 北原キヨ『可能性を求めて ― 武蔵野東幼稚園から小学校へ』、たいまつ社、昭和52年。
2. 北原キヨ『生活療法・花の実り ― 続・可能性を求めて』、中央出版、昭和58年。
3. 武蔵野東教育研究所『北原キヨの混合教育・生活療法への道 ― 自閉児と健常児の教育に捧げた生涯―』、学苑社、平成12年。
4. 寺田欣司『武蔵野東学園物語 ― 学園五十年の軌跡』、大進堂、平成24年。

#### 【参考資料】

1. 武蔵野東学園「武蔵野東学園の概要」、平成17年5月1日。
2. 武蔵野東学園「平成25年度文部科学省 インクルーシブ教育システム構築モデル事業 武蔵野東第一・第二幼稚園の『生活療法』について インクルーシブ教育の視点から」、平成26年3月。
3. 武蔵野東小学校「スキー教室」。http://www.musashino-higashi.org/sho-taiiku-skate.htm (平成28年11月1日閲覧)。